

赤ちゃん勝手に取り上げ日記 ① 妊娠駆け落ち気づいたら七カ月



慶応大学四年のA君(三)が、当時都内の某私立高校一年のN

子さん(二)と知り合ったのは一昨年の秋のこと。それから二人はなんとなく付き合い始めた。

高知出身のNさんは親元を離れての女子寮住まい。A君は管理人の目を盗んでは、毎日のように彼女の部屋に入り浸っていた。ところが、付き合い始めて半年、昨年五月の終わりに

「吐き気がする!!」

と言いだしたのである。A君は焦った。薬局で妊娠判定器を買ってきて調べてみたが、分からずじまい。仕方なく、A君はNさんを連れて新大久保にある、見るからに「墮ろし専門」といった感じの産婦人科医院の扉を開いた。診察が終わると先生は、暗い顔で、

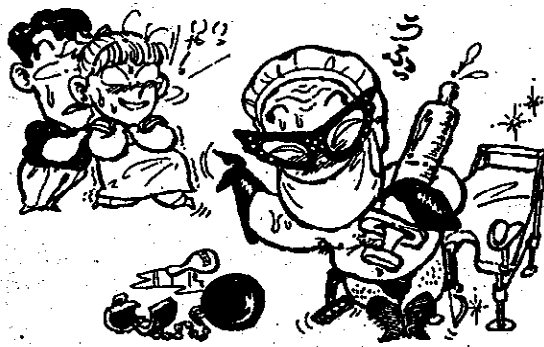
「確実に妊娠しています。早いうちにもういちど来てください」

A君は、この瞬間、

「あーあ、大学辞めるんだな」と観念したぞうだ。

「親が許してくれるはずがない。逃げよう!!」

二人は八王子のアパートに遁走した。いっさい跡を残さない



うこととなった。

九月十六日、文京区の某教会で式を挙げ、二人は早稲田に新居を構えたが、妊娠のことはすっかり忘れていた。すでに七カ月目に入り、腹もだいぶ目立ってきたにもかかわらず、

「どうしようか……」

と、二人で顔を見合わずばかり。某大病院に通い始め、出産のパンフレットをもらってきただものの、出産の際、妊婦は導尿、洗腸、半剃毛、会陰切開が施される……などと書いてあるのを見て、Nさんは、

「どうして、尿道に管を突っ込まれ、うんこを見られたり毛を剃られたりした揚げ句、切り刻まれなきゃならないの」

と言いだす始末。A君が説得しても、「入院したくない」の一点張りなのだ。A君も仕方なく、電話帳で新宿区内の助産婦さんに片っ端から電話してみたが、すべて廃業。医師から、「おそろく安産でしょう」

と太鼓判を押されていたこともあってか、A君は、「自分たちでやるしかないか」と、心を決めたのだった。

赤ちゃん勝手に取り上げ日記 ② 出産用具はお近くのスーパーで



「赤ちゃんを自分たちで取り上げよう!!」

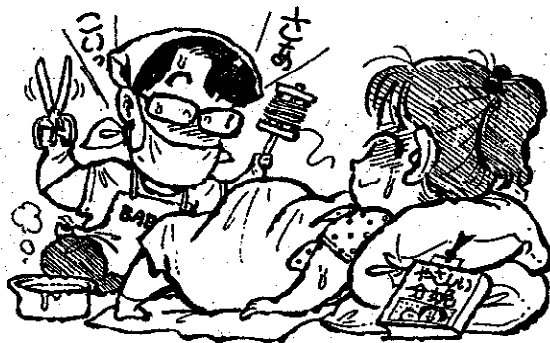
と決心はしたものの、夫で慶応大学四年のA君(28)にとっても、妻のN子さん(26)にとっても、もちろん初めての経験だったし、予備知識などあるはずもなかった。

おまけに、医者や両親が許してくれそうにない。A君はとりあえず周りを欺くため、都内の某大病院に、入院のための「出産申込書」を提出した(もちろん入院する気はなかったが)。それに、定期検診だけはきちんと受け、A君は、超音波診断装置に映るわが子が、N子さんのお腹でうごめく様子を見た

「よしよし、お父さんがお前を無事に取り上げるからね」と語りかけたのだ。八カ月目に入り、A君はまず、出産に関する知識を仕入れるため、慶応大学医学部の生協で、「分娩」「育児と出産」と

いうタイトルの分厚い辞書のような医学書を二冊買い込んだ。

その厚みがなんとなく頼りになりそうだったからだが、いざひととくと、専門用語ばかりでチンプンカンプン。



というたった二冊で、自信がついたのは、「ヘソの緒の切り方」だけだった。A君の頭を不安がよぎった。「失敗したら、おれの名前が新聞に載るなあ」

そして予定日の一カ月前、「そろそろ来るかもしれない」と思ったA君は、N子さんを連れて近所の薬局に、実用書を紹介されていた出産用の医療品を買いに行った。

消毒用アルコール、逆性石鹸(分娩作業中の手洗い用)、T字帯(産後の止血用)は揃った。しかし、ヘソの緒を切るとき、緒をしぼる糸はどこにもない。実用書にも、どこで売っているのか書いてなかった。

薬局の帰り道、スーパーへ立ち寄ったA君は、ふと、焼き豚用のタコ糸に目をつけた。「あっ、これこれ。ヘソの緒はこれで縛ればいいや」

こうして揃った出産用具一式は、洋服ダンスの上にボンと置かれた。

A君とN子さんはなんの不安もなく、一カ月後のその日を持つばかりだった。

結局、お茶の水の書店で買った、千円ほどの実用書二冊で勉強することにした。しかし、これとて自宅出産の方法なんか書かれていなかった。参考になったのは、「緊急にお産が起こった場合」

赤ちゃん勝手に取り上げ日記 ③ ヘンの緒は包丁胎盤はゴミ袋へ



赤ちゃんを自分たちで取り上げることにした、慶応大学四年のA君(28)と妻N子さん(28)に、どうしようもない日があった。

一月四日の午後八時。弱い陣痛とともに破水が始まった。すると、それまで、

「私はどんなことがあっても絶対に病院には行かないわ」と頑固に拒否していたNさん

も、急に弱気になり、「どうしよう、どうしよう」とオロオロし始めた。

「ここでしっかりしなくては男がすたる」

A君は自らを鼓舞し、出産準備にとりかかった。まず、寝室のベッドの上に黒いビニールのゴミ袋を敷きつめて、急造の分娩用ベッドをセット。風呂桶には逆性石けんを溶かし、妊婦用にお茶を準備した(分娩中妊婦は猛烈にノドが渇く、と実用書にあった)。

午後十一時、十分間隔で陣痛

が激しくなった。A君は必死で実用書の文句を思い出した。

「分娩の初期は力を抜き、子宮口が指三本分開いたら、いきんでよい」

ところが、いつ、いきませた



らしいのか分からない。A君は焦った。そのときだ。いきなり、「ドバァン」

と血が噴き出したのだ。周囲はまるで血の海。Nさんは、「助けてえー、死んじゃうー」と絶叫し、A君はすっかり自

信をなくしてしまった。

「もういきんでいいの?」

と聞かれても涙を流して、「ねえ、病院に行こうか」というのが精いっぱい。

「こんなことじゃいかん」

A君は平静を取り戻そうと、分厚い医学書を益スピードで繰りつけたのか、背を向けて勝手にいきみ出してしまった。

午前二時、赤ん坊の頭が見えてきた。A君はハッと我に返り、「いきんでいきんで抜いて...」と呼吸法の指導を始めた。

そして午前四時。A君はついにはわが子を取り上げ、赤ん坊は産声をあげ始めた。

「こんな夜中に急に赤ん坊の声が聞こえたら、近所の人は変に思うだろうなあ」

とA君がぼんやりしている

と、Nさんが、

「ヘンの緒を切らなきゃ!」とせつつかれた。A君は、焼き豚用のタコ糸でヘンの緒を縛ると、台所のコンロで焼いた包丁で切断した。胎盤は黒いビニールのゴミ袋に入れて、生ゴミと一緒に捨ててしまった。

赤ちゃん勝手に取り上げ日記 ⑧ 生まれてみれば黒字三十三万円



慶応大学四年のA君(三三)が、自宅のアパートで赤ちゃんを取り上げたのは、一月五日の午前四時のことだった。

「入院もせずに無事出産して、これでようやく落ち着ける」とN君は安心したが、騒ぎはこれで収まらなかった。

その日の午後七時、二人は妻のN子さん(二七)の実家に電話をかけて、

「今朝の四時に赤ちゃんが生まれちゃった!!」

と報告した。もちろん、不可抗力だったことにした。すると母親は大慌てで、

「そりゃあ大変だ。すぐ病院に連れていきなさい!!」

N君は仕方なく、近くの産婦人科医院に電話して、タクシーで病院へ向かうと、診察に出てきた医師は、

「えっ、本当だったの?」

と目を丸くした。聞けば、

「自宅で赤ちゃんを産んだので、いまから連れていく」

という類の電話はちよくちよつかかってくるのだが、そのほとんどがイタズラ電話。それが本当に連れてきたのでびっくりしたのだが、医師は赤ちゃんを見て二度びっくりした。ヘソの



結がタコ糸で蝶結びにしてあったからだ。

「どうして、生まれそだと気づかなかったのかね?」

と医師に聞かれたA君は、

「いやあ、陣痛が軽くて短かったし、あっという間に産んじゃ

ったんです」
と、とっさにナンをついたのだった。

A君が「確信犯」だったことは、親兄弟はもちろんのこと、近所の人も知らない。ちょうど出産時期が正月でアパートに人がいなかったのが幸いした。

件の医師は、入院を頑なに拒否する二人を見て、貧しい同棲時代とでも思ったのか、ヘソの緒を入れる箱をプレゼントしてくれ、

「がんばって、生きていくんだよ」

と、同情したのだった。

ところがA君たち、実はN子さんの両親から出産準備金として二十万円を仕送りしてもらったうえ、国民健康保険から助産費として十三万円支給され、都合三十三万円の黒字になったのである。

二人はそのカネで乳母車とビデオデッキを買い、箱根に一泊二日の旅行に出かけ、きれいに使ってしまったそうである。

赤ちゃんは女の子。現在、生後七カ月で、体重も九割に増え、元気にスクスクと育っている。